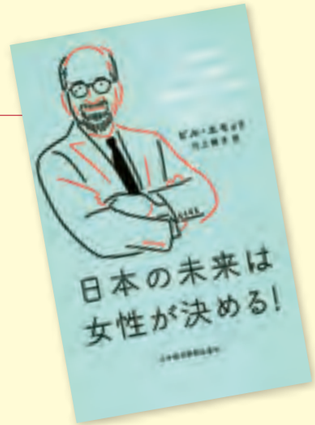
日本の未来は女性が決める!



■ ビル・エモット 著
川上 純子 訳
■ 日本経済新聞出版社
■ 2019年初版
■ 1,800円(税別)

本書は、英エコノミスト元編集長ビル・エモットが、22人の女性をインタビューして、日本の女性の活躍をもっと効果的に支援するためには、「ヒューマノミクス政策」を実現すべしと提言するものである。

筆者は35年にわたる在日中、エコノミスト編集長として、女性のインタビューを一度もしなかった。まずそのことに驚いたが、男性中心の日本では、これで事足りたのだろう。英国に帰国後、筆者は「日本の未来は女性が決める!」と確信したという。経済の専門家が日本女性に期待してくれることは誠に喜ばしい。

インタビューの対象女性は「男性中心的で、男性のような働き方が求められ、女性蔑視が根強い分野で、とてつもないことを成し遂げた人たちだ。」

22人を数人ずつ纏(まと)めて、7つの章に記載している。コンパクトで、とても読みやすい。特に、小池百合子・国谷裕子・林文子氏を取り上げた「政治に影響を与える」は、小池氏と国谷氏のジャーナリストとしての資質の違い、小池氏と林氏の自治体のリーダーシップの違いを、鋭く分析していて読み応えがある。

あなたも本書で、素敵な女性に出会い、日本の明るい未来に思いを馳(は)せることができる。

名取(なとり) はにわ　学校法人社会事業大学理事長
元 内閣府男女共同参画局長

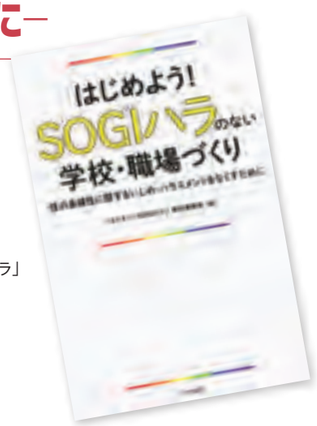
ヒューマノミクス政策

2012年に提唱された経済優先の「アベノミクス」に対する「男女を含む国民全体が自分の可能性を発揮できる政策」のこと。

1999年6月に成立した男女共同参画社会基本法における*「男女共同参画社会の定義」と通じるものがある。この基本法も男女双方を対象としている。

*男女共同参画社会の定義
男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担(にな)うべき社会

はじめよう!SOGIハラのない学校・職場づくり
―性の多様性に関するいじめ・ハラスメントをなくすために―



■「なくそう!SOGIハラ」実行委員会 編
■ 大月書店
■ 2019年初版
■ 1,600円(税別)

そもそもSOGI(Sexual Orientation(性的指向)and Gender Identity(性自認))って何?聞き慣れない言葉だけど。LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー)なら分かる。本書によれば、LGBTは特定のセクシュアリティを持つ人の集合、SOGIは誰もがもつ性の在り方を捉える概念だという。自分がどの性別なのかという認識(性自認)と、性愛や恋愛が向く相手の性別(性的指向)にはさまざまなバリエーションがあり、個人のアイデンティティの中核の一つになるという。

にもかかわらず、誰かの性的指向や性自認を理由に差別的な言動や嘲笑(ちょうしょう)を浴びせたり、いじめや暴力など精神的・肉体的な嫌がらせをすることは深刻なハラスメントであり、人権侵害になる。ゲイであることをカミングアウトした生徒に、「仲良くして俺らもゲイと思われたら嫌じゃね?無視しよう!」と仲間外れにしたり、服装を強要することもそれにあたる。

本書は、SOGIハラとは何かについて分かりやすく解説し、主に学校(および職場)で起こるSOGIハラと支援のあり方を解説する入門書と言える。教師のみならず子を持つ親にも読んで欲しい一冊である。

伊藤(いとう) 裕子(ゆうこ)　文京学院大学 人間学部 元教授

カミングアウト

家族や他人に自らの性的指向や性自認を開示すること。性的指向や性自認は外から分からず見えにくいもの。一方、社会にはこれらに関する差別や偏見が蔓延(まんえん)している。そこで当事者の多くは、「普通」とされるものと異なる自分の性的指向や性自認を周囲に言わないことで身を守っている。「よりそいホットライン」の報告書によれば、「カミングアウト」を行っているのは2割程度、学校や職場では1割強となっているという。

貧困専業主婦

■ 周燕飛 著
■ 新潮選書
■ 2019年初版
■ 1,200円(税別)

専業主婦と聞くと、皆さんはどのようなイメージを持たれるだろうか。おそらく、経済的に豊かで、家事・育児に熱心であり、学校や地域の活動にも積極的に参加するといった女性を想像するのではないだろうか。このような女性の在り方は、日本の中流家庭の象徴であり、賃金が伸び悩む中において勝ち組と呼ばれることもある。これに対して、真逆の専業主婦像が存在することを示したのが本書だ。経済的に決して豊かとは言えず、衣食住において厳しい状況に直面する専業主婦が存在することを大規模調査から得られたデータを用いて明らかにしている。本書は、専業主婦像が単一ではなく、その中にこれまで指摘されてこなかった格差が存在することを指摘した力作だと言える。本書の中でも特に興味深いのは、このような貧困に直面する専業主婦の幸福度が意外にも低くなく、3人に1人が自分のことを「とても幸せ」と評価している点だ。この結果は、女性の幸せにとって何が影響を及ぼしているのかを考察するうえでも興味深い例だと言える。また、本書の中では貧困に直面する専業主婦の背景や子への世代間連鎖についても検証しており、その実態を包括的に知るには有益な一冊となっている。

佐藤(さとう) 一磨(かずま)　拓殖大学 政経学部 准教授

貧困専業主婦

貧困専業主婦とは著者の造語である。ここでの貧困とは、世帯所得が全世帯の所得の中央値の半分に達していない状態を意味する。このような世帯における専業主婦を貧困専業主婦と定義している。書籍の中でも指摘されているように、専業主婦のうちの約8人に1人が貧困専業主婦に該当し、必ずしも専業主婦が豊かさの象徴とはなっていない。彼女たちが働かない理由はさまざまであるが、主な理由として「子育てに専念したい」があげられる。ただし、自らの健康上の問題や家庭内の問題から働くことを断念している場合も多いといった特徴がある。

女性学・男性学
―ジェンダー論入門―[第3版]

■ 伊藤 公雄
樹村 みのり
國信 潤子 著
■ 有斐閣アルマ
■ 2019年初版
■ 2,000円(税別)

1960年代に女性たちが固定的性別役割に異議申し立てをしたのをきっかけに、長らく男性の視点から語られてきた社会や学問を女性の視点から読み直す、「女性学」が誕生し、その延長線上に「男性学」や「ジェンダー論」が成立した。その系譜(けいふ)を同書の中で読み取ることができる、『特講 女性学って何?―女性学とフェミニズムの不可分な関係』は必読だ。

男性を巡る問題も多く取り上げている。特に気になったのは、アメリカで1990年代に急成長した男性運動のひとつ、キリスト教原理主義に基づく「プロミス・キーパーズ」だ。いったん下火になったものの、勢いを取り戻している。ホームページには、「男らしさが危機に瀕(ひん)している」、「かつてないほど、世界は男性を必要としている」などの男性の復権を望む言葉が並ぶ。トランプ政権がめざす「偉大なアメリカ」や「強いアメリカ」を彷彿(ほうふつ)とさせる言葉だ。2020年8月には10万人収容可能なスタジアムで大会が予定され、参加費も1人1万円強と高額だが、その巨大なスタジアムは人で埋め尽くされるのかもしれない。世界的な右傾化は、女性、男性、LGBTsにどのような影響を及ぼすのか。本書と今日の動きを行ったり来たりしながら、読み進めると新たな気づきがあるかもしれない。

西尾(にしお) 亜希子(あきこ)　武庫川女子大学 共通教育部 准教授

キリスト教原理主義

キリスト教の一部のプロテスタントの間にある、「聖書」を絶対視し、現代社会においてもその教えどおりに生きようという考え方のこと。聖書では、神が天地万物と人間を創造し、男と女が子どもを産み育てることになっているため、ダーウィンの「進化論」をはじめ、「同性愛・同性婚」や「妊娠中絶」にも反対の立場をとる。アメリカ南部の「バイブルベルト(聖書地帯)」と呼ばれる一連の州を中心に「妊娠中絶禁止法」が相次いで成立している。特にアラバマ州ではレイプや近親相姦による妊娠もその対象で、唯一の例外は、母体にリスクがある場合である。